

提出日： 2026 年 6 月 30 日

研究促進期間制度 研究実績報告書

所属学部・研究科	身分	氏名
文学部	教授	小野泰央

研究期間	以下1～4より、取得した研究機関を選択し、該当番号を右欄にご記入ください。	
	1. 2025年4月 1日 ～ 2026年3月31日	1
	2. 2025年9月 1日 ～ 2026年8月31日	
	3. 2025年4月 1日 ～ 2025年9月20日	
	4. 2025年9月21日 ～ 2026年3月31日	
活動報告	研究期間中に実施した研究活動を具体的にご記入ください。 海外活動補助費を受給した方は、海外活動の内容が分かるようにご記入ください。	
	日本や中国から海外に流出した古典籍および漢籍の調査を行い、新たな資料を発掘する。特に流出の甚だしい英国において、大英図書館・ロンドン大学等での調査を行った。大英図書館においては古典籍・漢籍に加えて、敦煌文書が収蔵されている。これらの古典籍・漢籍・敦煌文書を文献学的に調査する。その上で、既存の古典研究における位置づけを試みた。	
得られた研究成果について	上記の研究活動の結果、得られた研究成果についてご記入ください。	
	黄堅編とされる『古文真宝後集』は、近世に至って、林羅山の講を参考にした鶴飼石斎の『古文真宝後集諺解大成』が刊行される。林羅山講には別に、寛永元年（一六二四）刊の『諸儒箋解古文真宝後集』に満田懶斎（川口文庫『菅家文草』の書写者）が注を書き込んだ大英図書館蔵『羅山講本古文後集』がある。この二篇の林羅山講による注解の特徴は、それぞれの文体史に言及していることにある。それらはそもそも『魁本大字諸儒箋解古文真宝』の注に、例えば、「辞」に対する休斎注に「此辞之権輿也（此れ辞の権輿なり）」とある文体史を敷衍した結果であると考えられるが、その文体史の起点には林羅山における講釈の存在があったことになる。林羅山は、同時にその「随筆」においても詩文史を展開しているから、宋学を受容した林羅山によって日本における詩文史が展開されたと言える。以上のことを解明した。	
今後の計画について	得られた成果を踏まえ、今後どのように研究を発展させる計画か、ご記入ください。	
	この大英図書館蔵の『古文真宝後集諺解大成』によって、林羅山の門弟における学習方法が明らかになったのであるが、このことを端緒にして羅山の文学論を展開することを今後の課題とした。	